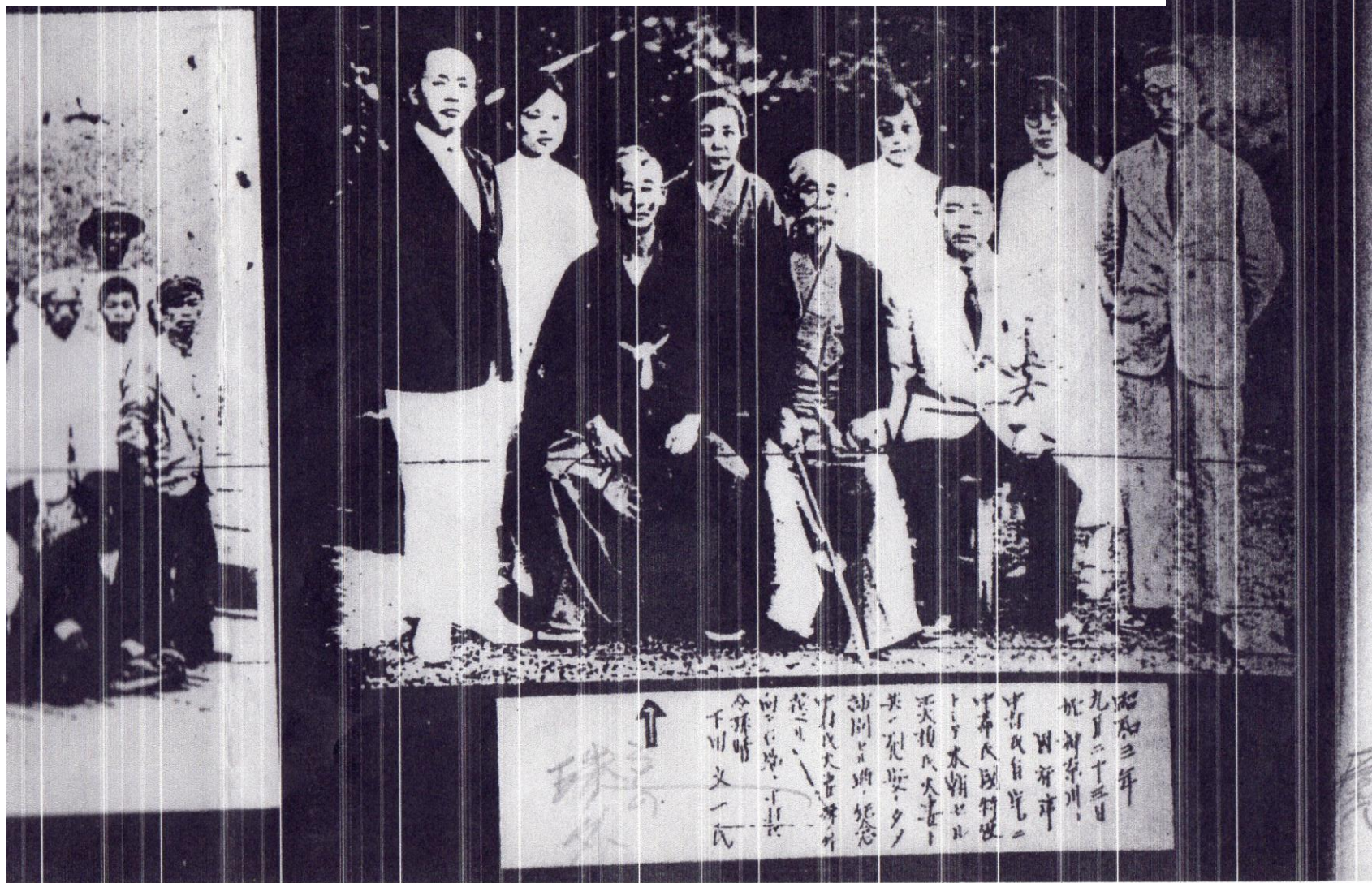


中村弥六と王大楨

片倉芳和

昭和3年（1928年）9月23日、於神奈川、国府津

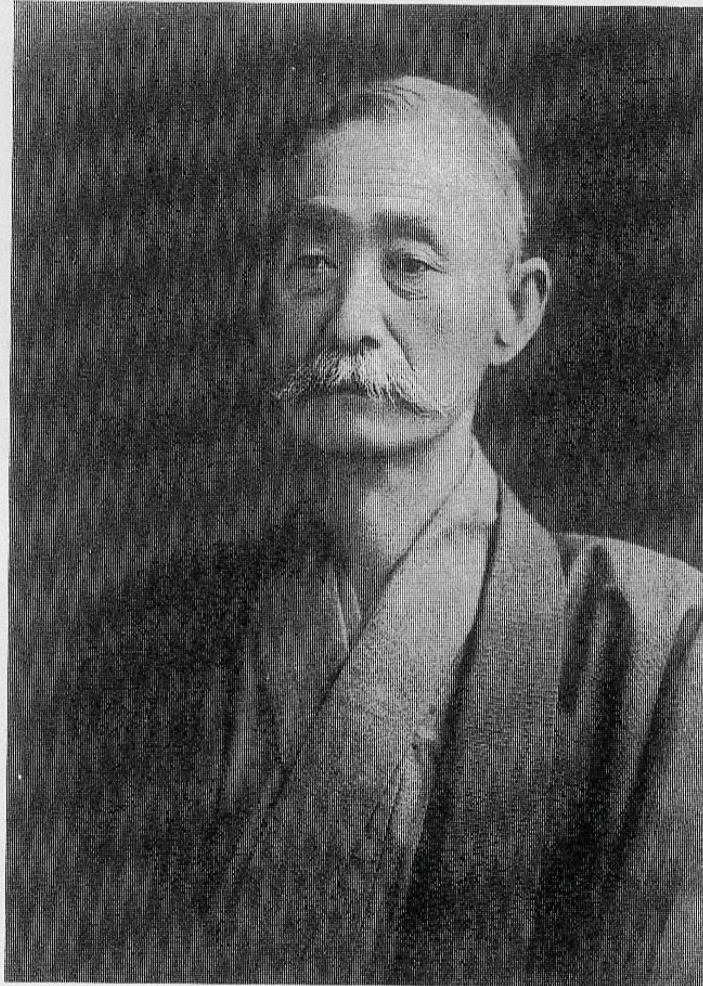


- 中村氏自宅ニ中華民國特使トシテ来朝セル王大楨夫妻ト其ノ慰安ノタメ訪問セル時ノ記念
- 中村氏夫妻殊ノ外喜ベリ
- 向テ右□ハ中村氏令孫婿下田文一氏



中村弥六 (1855 ~ 1929)
高遠歴史博物館蔵

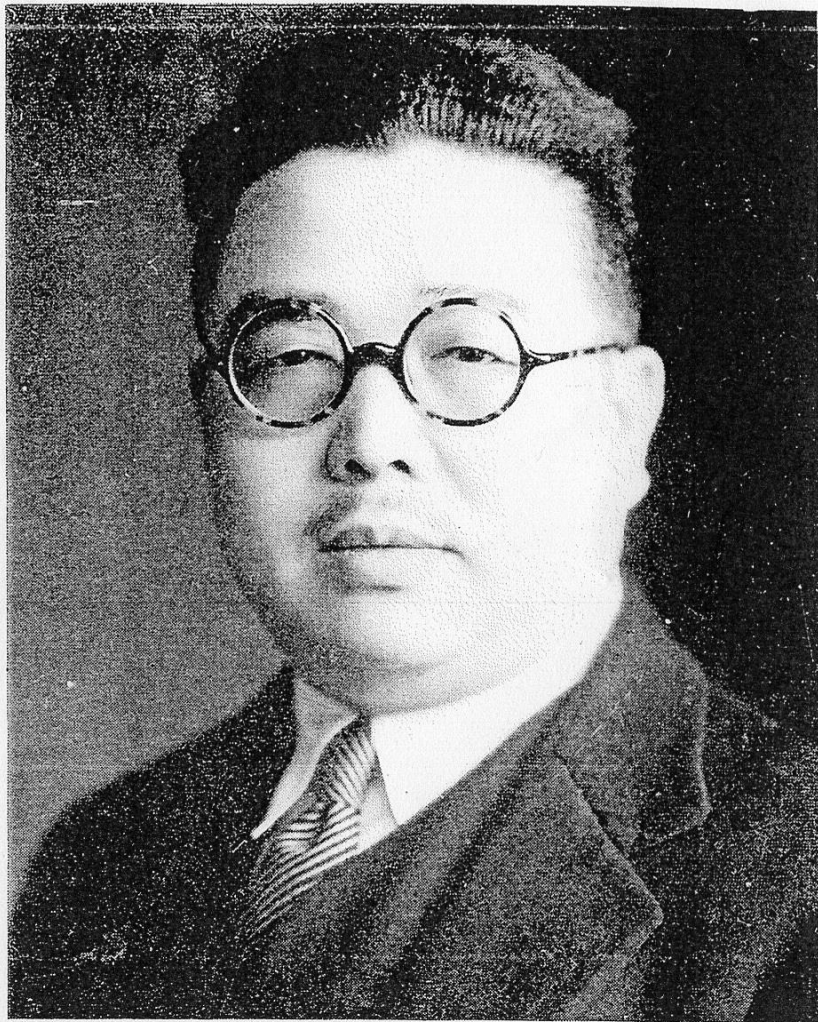
中村弥六、74歳（森下正夫『中村弥六物語』）



中村弥六（74歳）

王大楨（1893～1946）
1928年5月3日済南事件
勃発すると7月～11月国
民政府特使として来日。
写真出典（花村一平
『中国革命の舞台裏；
北京宮元公館』1973年、
原書房）

▶ 盟友・王大楨（苋生）。戦後，国民政
府軍事委員会・国際問題研究所主任に
就任。



国民政府特派使節 王大楨「新しき
中華民国の建設と日支両国の関係」
（『支那研究』昭和5年（1930年）
慶應義塾望月基金支那研究会編）、
日本滞在中この他に6編の論文や論
説を公表現在国会図書館のデジタル
サービスを利用して読むことが出来
る。王大楨の昭和3年（1928年）国
民政府特派使節としての目的と日本
での行動については『王芄生先生紀
念集』（邵毓麟著、1973、台北：文
海出版社、1973）で王芄生として書
いている。

新しき中華民国の建設と日支兩國の關係

國民政府特派使節

王

大

楨

「王芃生紀念集」邵毓麟著、
1973年、文海出版社

一個平凡黨員的回憶與自我檢討

·王芃生·

——中國國民黨五十週年紀念論文——

(錄自中國國民黨黨史編纂委員會庫藏本)

上次國府紀念週，本黨先輩張溥泉同志，報告慶祝本黨五十週年紀念時，希望各同志蒐集關於革命之佚聞遺獻，或本諸親歷追憶，著論發揚本黨領導革命之光榮史蹟，以資紀念。欣聞之下，不勝感奮。

國父手創興中會以來，雲馳電掣已屆五十週年慶典。予自十八歲參加革命，屈指亦三十四年矣。在此短期間，本黨創造中華民國，艱苦備嘗，危難迭起。黨與國運，同其休戚。其間不但世界變局，天翻地覆，幾闕滄桑。而吾黨護國、護法、北伐統一，乃至抗戰八年，幾度死裏求生，轉禍為福。雖今勝利在望，然猶未恢復和平，與世同庥。反遭大敵壓境，餘倖猶兇。致本黨五十週年大典，仍以戰時從簡，未獲於康樂和平中舉行歡忻歌舞之普天同慶，則凡屬黨員，除追慕總理，緬懷先烈，體念總裁之宵旰憂勤，各獻其身家性命，協同軍民，加倍努力，以爭取戰爭與和平之勝利，完成抗戰建國之大業外，當茲盛典，首應作嚴肅之自我檢討，各自增進其忠黨愛國之熱誠，匡補其殫精竭力之所未足。反躬自省，不勝惶悚慙小之至。

裏，且有若干特殊成就。反是：若爲予能力所不勝者，雖地位高於現職，從未敢貿然嘗試。例如：調停魯何事竣，譚院長甚爲嘉慰。有保予爲衛生部次長，以示酬庸之好意。予以非所學而婉辭。如此者尚多，不便詳述。迄今予猶爲一白丁與平凡黨員，不失本來面目。且樂爲之。此非欲自表白。乃自省奉行遺教，殊感不足。惟此一事，願終身實踐。俾有顏面謁總理於九天也。予以憂患之身，懸拙之資，迭當疑難之任，從密切之政。惟有以勤補拙，以修正謬。逆來順受，舍小從大。如此定力，實服膺總裁「實行主義犧牲個人」之所賜。此中多不可言，其有時間性已過，略得告慰於各同志者。例如當五三濟南慘案之後，廢止中日條約之前，時正與英美開始收回關稅權交涉。日本軍閥，反乘機鼓動輿論。欲於我發出廢約通告時，藉以實力保護既得權爲名，派海軍及陸戰隊來華示威。其演變固未必即敢逕發動戰爭，挫我北伐。至少擾我收回稅權交涉。使英美躊躇，而先就商於彼。爲當時一大危機！王部長得報，囑我以個人資格，持其介紹私函，對日作非正式之游說與宣傳。冀不累及政府，而止其出兵。此實一大疑難之秘密任務。予不携一助手，單騎見回紇。且擒賊擒王。先與出兵有關之參謀本部第二部長松井石根中將，海軍軍令部支那班班長津田靜枝少將。及陸軍省代表三井清一郎局長等，在「錦水」舌戰四小時後，彼等已不敢出兵。（詳情專文另述）當時松井等，開始即以「帝國既定之對華方針，決不因王大楨君一人來此，而有所變更！至少王君當知道」。『如此游說無用，可派人陪游三日，走爲上計』。無異見面即下逐客令。予因撇開本題，而指出伊藤國策完成之日，即已死滅。現日本國際地位孤危已極。並不見有一政治家政論家慮及此事，擬議新策者。如盲動，自招潰敗

。中國仍有死裏求生把握。由談日本自身問題入手誘其入彀。卒使之喪失自信而約考慮一星期再答復。至是改口稱：「如君所說，知以貴政府立場，非發廢約通告不可。此點今已諒解。但如先即對日本適用臨時辦法四條，則未免使日本大難忍受！仍將以實力擁護既得權。此點盼電貴國政府特別加以慎重考慮」。予當時見已放棄其破壞關稅交涉，甚至演成破壞北伐之武力行動。而僅謀實際上暫保與英美同樣之待遇。並不再爭辯而明白承認我發廢約通告之必要。在當時已盡其可能之讓步。故未旬日，即已完成主要使命。密電報告王部長。廢約之一大危機，遂告消弭。惟當時爲田中內閣，予猶恐其信心不定，或藉他故作怪。故再向內閣全員、樞密院、各政黨、及元老，乃至與其皇室東久邇宮親王等，作周密之游說後，又對東京各大學及著名中學以及各團體。乃至橫濱、千葉、長野、神戶、大阪，各地方團體等迭開講演會及辯論會，有把握後，並曾作民政黨選舉之應援演說。暗植推倒田中內閣之勢力，以爲牽制。

當時日本向咨承認國民政府，欲藉獲若干交換條件，適日皇將行加冕典禮。予商於汪榮寶（袁甫）公使。以國際禮儀與國際政治，固有區別。但既通慶弔之後，究不便再因承認問題，而提出要求。遂共同建議，備禮道賀。日本外務省亦曾以「共同公文」方式，發出請柬。忽東亞局長有田八郎，向汪勸告：貴國道賀，固屬好意。但敝國尚未承認貴國國民政府。此舉大可不必！汪憤極告予。予曰：公使地位不便嚴加斥責，免其惱羞翻臉。但同去，由我發言。必要時，委責於我個人言論，非國家意思可也。遂往詰責有田。問：汝爲新外務大臣乎？曰否。然則田中兼大臣有公函招請。汝以何資格辭客

王芃生先生的生平及其著述

陳固亭

——紀念王先生逝世二十週年——

王芃生先生，名大楨，字芃生，後以字行，湖南省醴陵縣人，生於民國紀元前十九年，（西曆一八九三年）正月十七日。民國三十五年（一九四六年）五月十七日，以腦溢血突發，逝世於南京，享年五十四歲。茲值先生病逝二十週年，謹略述其生平及治學著作的貢獻，藉申懷念之忱。

先生幼時聰敏好學，肄業陸軍小學時，即酷愛文史，喜郊遊，青年時期，參加長沙起義，親見先烈捨身取義之事，遂決心服膺革命主義，畢生為復興民族大業而努力。辛亥（一九一一年）九月，先生奉譚祖藩先生之命北上，入陸軍軍需學校，以後追隨黃克強、宋遜初二先生，民國五年（一九一六年）留學日本，肄業陸軍經理學校，對日本歷史文化，政治經濟，均有精湛的研究。

民國七年（一九一八年）協約國出兵西伯利亞，先生以見習日軍後方勤務的名義，冒寒履險，由遼吉黑到遼海參威、伯力、滿州里、赤塔等地。細察日人用兵動靜進退成敗之道，經外蒙古而歸，著有「見聞記」一卷，可以看出他此行的收穫及用心的所在。

民國八年（一九一九）巴黎和會，我方失敗，國議驟然。先生再渡日本，入東京帝大經濟學部，鑽研日本文化源流，瞭解其政制得失。治學之暇，酷好蒐集日本朝野謀我的確證密籍，不惜重資購

儲，著有「中日關係之科學研究」、「臺灣交涉真相秘錄」等書。

民國十年，（一九二一）華盛頓會議開幕，先生協助王正廷先生辦理魯案，復因張宗昌入魯，乃拂袖而去。重遊三島，作日本古語古文書的研究，因得豁然明辨日本古史出於偽造，而撰著「日本古史辨證」及「日本古史之偽造與山海經蓋國及倭屬燕之義證」發前人所未發，給以後研究日本史學者以新的啓示。

民國十五年（一九二六）國民革命軍動員北伐，先生匆促返國，抵達湘鄂，先後任第八軍上校參謀，第三十五軍參謀長，進駐皖省兼代安徽省民政廳長，武功政事，均著辛勞。寧漢分裂，以總代表名義赴上海謁晤今總統蔣公，嘉其才識，任為革命軍總部參議，這是先生追隨蔣公的開始。

民國十七年（一九二八）五月三日，濟南慘案發生，日軍阻礙北伐，尤其對於我收回關稅權的交涉，百計妨害，先生在危疑震撼之時，奉密命單身赴日遊說，與松井石根、有田八郎等迭次晤談，據理爭辯，無不折服。並訪朝野元老，申述中國北伐統一與對日友好政策。又至京濱神阪、長野、千葉等縣。演講辯論，支持民政黨執政，以糾正田中內閣侵華政策之錯誤。不久濟南撤兵，關稅交涉成功，日人且進而承認國民政府，此時日人多知先生之名，黑板勝次且以此事記於大事年表。先生著「孤軍舌戰三島紀要」以誌其行，足見他對日本國情研究的透澈，運用的巧妙。

九一八事變未起，先生預知其不免，曾至北平謁主事者，請早防備，未得如願，因此憂憤成疾。及事變發生，我國訴之於國際聯盟，先生應顧少川先生之邀，力疾赴日內瓦，攜帶其多年所珍藏的秘

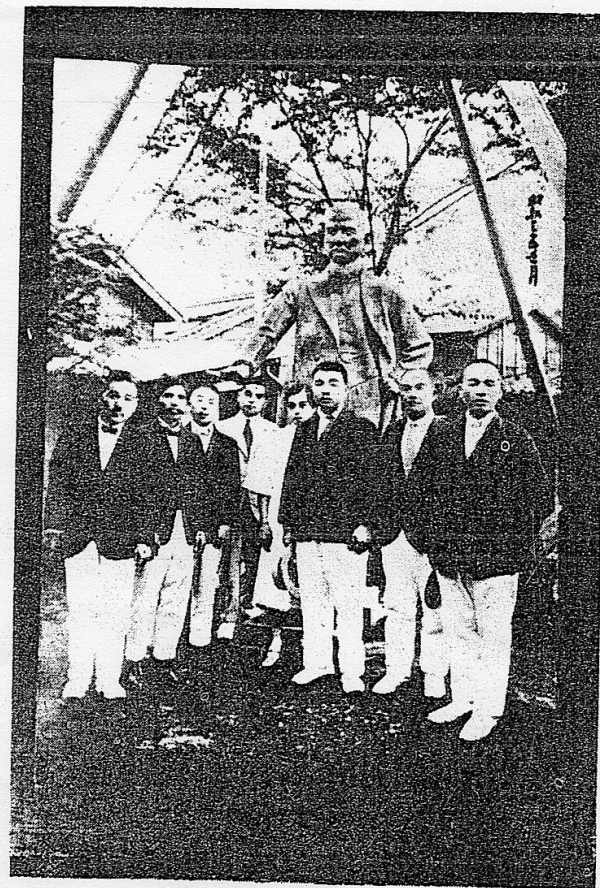
昭和3年（1928年）10月17日、東京中野寿々喜

- 民国観戦武官
 - 王右□（一字不明瑜?）将軍
 - 林振雄将軍（日本陸士**10**期卒）
 -
 - **1930年**（昭和5年）黄埔軍校
 - 教育長として梅屋の孫文銅像
 - 贈呈を迎える。
 - 胡旗三将軍
 - 熊斌将軍（軍事委員会委員）
 - 馬伯援（元留日支那学生監督）
- 日本人
頭山満
小山邦太郎
代議士

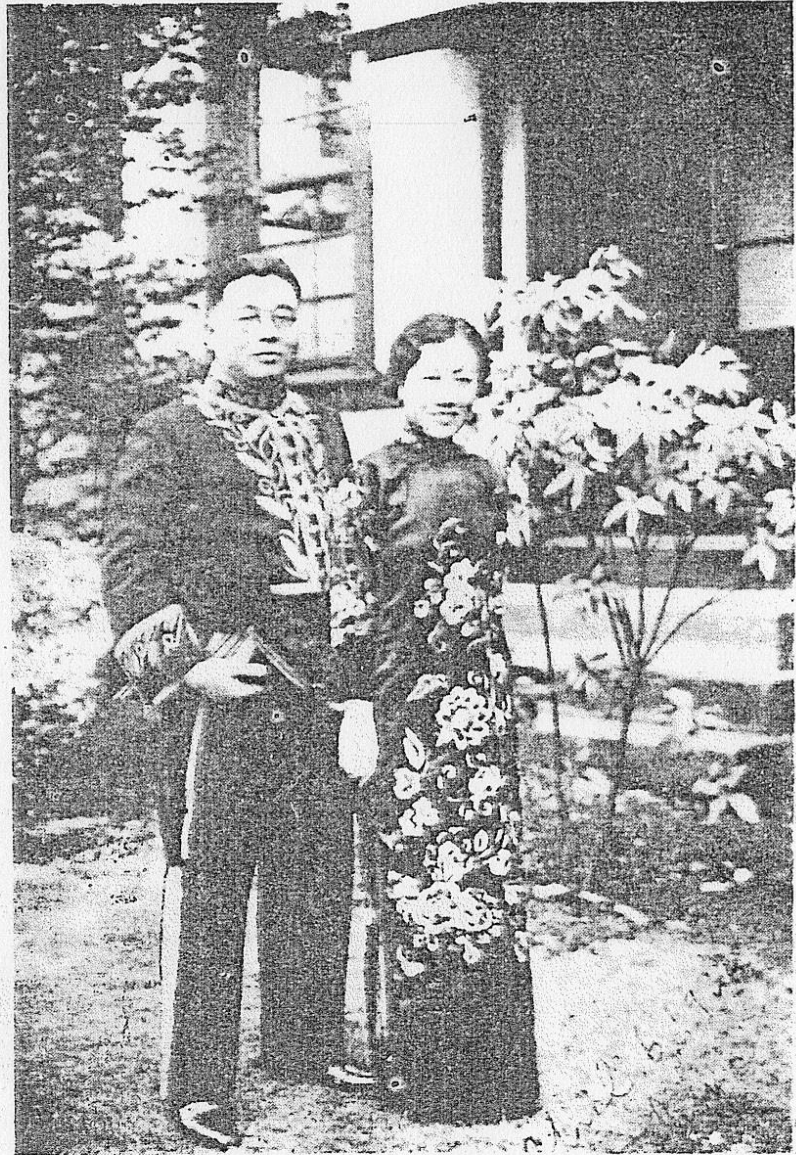
国父銅像於民国十八年（1929年）三月四日運抵上海
合影王芃生先生接宴於功德林餐廳致謝護送者



国父銅像運抵南京與歡迎者
（中立者為王芃生先生）



王芄生先生任駐日大使館参事時與夫人鍾賢英女士合影（民國25年）（1936年）、（駐日大使 許世英）（1936年2月～11月東京在任）（1928年来日時の前夫人とは1932年離婚し米ウエルズリー大学出身の鍾と再婚。）



王芄生先生任駐日大使館参事時與夫人鍾賢英女士合影

「王大楨と周恩来・毛沢東」（戸叶武『政治は足跡をもって描く芸術である』1988年、戸叶武遺稿集出版会）

と東大の同級生であった。それ以後は大東亜総務局長杉原荒太と会談したのみである。

王大楨と周恩来・毛沢東

春雨に煙る上海埠頭に、妻の戸叶里子を伴って立つと、一九二九（昭和四）年正月に、ロンドン留学の折に立ち寄ったことのある上海の、戦争と革命でためつけられた動乱期の変化が、走馬燈のように回想された。

いま重慶の国共合作の政府で、対日戦の外交戦略を練っている頭脳は、中国共産党きつての切れ者周恩来と、蒋介石側近の王大楨（国際問題研究所長王凡生）である。

周恩来は一八九八年、江蘇省淮安の生まれ、その故郷は魯迅（周作人）と同郷の浙江省紹興である。彼はロシア革命の起きた一九一七年に二十歳で日本に留学し、その翌年の五・七国恥記念の前夜、西神田の中国料理店「維新号」での中国留学生代表者の集会で、警視庁の警官に殴る蹴るの暴行を加えられ、これに憤慨して日本帝国主義打倒を決意し、祖国への集団引揚げを敢行した。

その翌年の一九一九（大正八）年の五・四運動には、北京の毛沢東、天津の周恩来、あい呼応して、抗日運動の先頭に立った。

周恩来は、学生運動の首謀者として天津の大学を追放されるや、フランスに留学し、そこで中国共産党に参加し、ヨーロッパの組織の拡大に努め、一九二四年に帰国した。時あたかも孫文提唱の第一次国共合作時代であったので、パリでの政治力が高く評価され、広東の革命軍養成機関黄埔軍官学校（校長蒋介石）の政治部主任代理（主任は汪精衛）に迎えられた。その後幾度、一九三六（昭和十一年）年の西安事件で、張学良軍に監禁された蒋介石を救ったかわりで、重慶入りとなったのである。

革命家周恩来の一生は波瀾万丈ではあったが、毛沢東と双璧の功成り名遂げた豪華な生涯であった。

毛沢東と王大楨とは、若き日は湖南の二秀才とうたわれた。毛沢東は湖南第一師範卒業の後、恩師の北京大学の楊昌齊（毛沢東の最初の夫人楊開慧の父）のひきで、北京大学図書館主任李大釗の下でマルクス・レーニン主義をひたむきに学んだ。一方の王大楨は湖南から日本留学生に選ばれ、東京の陸軍経理学校を卒業し、東大その他で政治経済、外交史と国際法を学び、中国の陸奥宗光たらんことを期した。悲願は治外法権の撤廃にあった。

私が中国の新しいタイプの外交官としての王大楨に最初に会ったのは、一九二八（昭和三年）の九月、孫文の秘書をつとめ『日本論』の著者で知日派の元老であった載伝賢（載天仇）の推挙により、国民政府の主席に就任した蒋介石から、済南事件解決の特使として東京に派遣された時である。

王大楨は終戦後蒋介石の命令で上海に走り、在留日本人代表の岡崎嘉平太、内山完造らと会談し、日本に親切をこめた解決を行ったが、前述のように終戦前後の過労のため心臓を冒され飛行機の中で病死した。彼は治外法権撤廃、不平等条約の撤廃をめざし、中国の陸奥宗光たろうとの念願に生きたが、その悲願は遂に虚しかった。

謀略協定があったことが明らかになった。しかもその日は、八月十五日に日本が無条件降伏した日の前日とのことであった。王大楨は終戦後蒋介石の命令で上海に走り、在留日本人代表の岡崎嘉平太、内山完造らと会談し、日本に親切をこめた解決を行ったが、前述のように終戦前後の過労のため心臓を冒され航空機の中で病死した。彼は治外法権撤廃、不平等条約の撤廃をめざし、中国の陸奥宗光たろうとの念願に生きたが、その悲願は遂に虚しかった。

『世界史の中の一億人の昭和史』4 昭和五十三年五月一日、毎日新聞社

小磯首相、緒方竹虎國務相は彼を通じて重慶工作に最後の望みをかけたが、繆斌は重慶の秘密警察の長兼笠將軍と親しい人物で、南京政府からも重慶政府からも警戒されていた人物であり、終戦後中国政府に日本に協力した戦犯者として処刑されている。

私の敗戦外交の構想を聞きたいと松井石根大将から招かれたのは、一九四四（昭和十九）年九月であった。連絡者は朝日新聞社の支那部長をつとめ、一九二四（大正十三年）十二月二十八日、孫文の神戸高女講堂における「アジア主義」の講演を行った際、孫文の紹介をした神尾茂であった。松井大将は私のことを大東亜省の杉原荒太総務局長から聞いたというので、私は率直に日本は敗れるという認識のもとに、今になっては米・英両国は耳を傾けてくれないし、重慶、延安工作も成果は挙げられない、第一にソ連を通じて重慶に働きかける以外に活路はない。モスクワには近衛文磨と建川中將、重慶には松井大将と私、現在の軍部には腹を切つて軍の責任を謝罪するだけの人物がいらないから、現役の軍人に代わつて松井大将、建川中將が腹をみことにかつ切る覚悟を示していただきたいと進言した。

東条内閣が倒れ、小磯内閣が出現しても、背水の陣を張つての和平展開がされず、「レイテは天王山である」との小磯発言のみが空転した。

一九四五（昭和二十年）年、中国政府からは宋子文が大統領を訪ね、ソ連を打診せよとの暗示を受けたので、米英ソ三国の巨頭ルーズベルト、チャーチル、スターリンの三巨頭の戦時中の軍事

黄興と萱野長友（1911年10月、武漢で辛亥革命が勃発すると、萱野は前線に駆けつけ 総司令黄興と起居を共にして補佐にあたった。）



文と梅屋夫妻

黄興(中央)と萱野長知(むかって右)

梅屋庄吉は一
の革命運動を支
梅屋が孫文と一
のは、一九一三
った山東拳兵の時
めに、先ず孫文が

尊い志

に出ることを避
した。梅屋が事
何よりも雄弁に
「孫文は盟友、
革命ノ兵ヲ挙

孫文
1924年11月30日、
神戸オリエンタルホテル

11月28日
「大アジア主義」講演行
神戸高等女学校



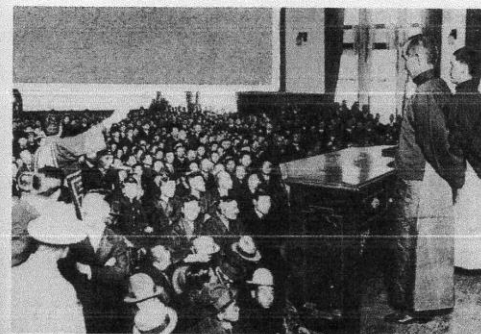
17 神戸オリエンタル・ホテルで

11月30日に北嶺丸で神戸を出航する直前の記念写真。前列孫文夫妻と山田純三郎夫人喜代、後列右から菊池良一、戴天仇、島田経一、宮崎震作、萱野長知、宮崎龍介、山田純三郎
11月24日、船抵日本神戸。图为孙中山与前往欢迎的日本朋友的合影。



孫文・宋慶齡夫妻

孙中山和宋庆龄在日本神户的留影。



18 神戸高等女学校で「大アジア主義」の講演をおこなう孫文（1924年11月28日）

11月28日、孙中山在神戸特别拜访了日本文人头山满先生。继又到神戸高等女学校对神戸商业会议所等五团体发表《大亚洲主义》的讲演。图为孙中山在讲演。



134 孫文の歓迎会(天津の張園館)

12月4日、孫文は神戸から天津に到着

12月4日、孙中山一行抵达天津，受到各界热烈的欢迎。图为孙中山在天津张园行馆同各界欢迎代表的合影。

上海「申報」中華民國22年(1933年)1月11日「日本有識人士反對軍閥暴行 梅屋莊吉來電聲明」

請讀
本書

范銓
編輯

外小對此書作爲
中國最速向上海南
京杭州蘇州蕪湖漢
口長沙衡州常德南
昌廣州梧州柳州重
慶北平天津濟南
南徐州各地本局購
買一亦有致函購者
費三分半掛號另加
八分期限一月過期
作廢

巷戰

二十餘名、今晨在王
宮殿、又日兵二十餘
、越東便門外同福寺

八旅鐵盔

八混裝時製備鐵盔八
、用鋼盔製造、鐵盔
、此物轉贈第九旅何
、領到、並面謝該會

軍辦法

、對於各界贈送抗日
、乾糧頭項查及背心等
、不勝感荷、並請各界

蘇馬向國人呼籲

自俄境發出泣告國人書 請國內援助歸國統軍殺敵

北平 逗留俄境之蘇炳文馬占山等將
領、以維國事、並請國內援助歸國、統軍
表泣告國人書、並請國內援助歸國、統軍
殺敵、原由沃木斯克拍來、全文甚
長、據蘇氏代表談稱、目前國難嚴重、政

日本有識人士 反對軍閥暴行

梅屋莊吉來電聲明

南京 日本年來觀國際公理、向我
侵略、造成國民深不可解之惡感、此事
在彼國有識之士及一般人民、皆表示反
對、日人梅屋莊吉昨電中央某要人、聲明
日本此種暴行、純爲彼國內軍閥之舉動、
有識之日本國民、決不同情、并謂彼等
其個人力量、促日本全體國民之醒覺、反
對其軍閥政府並侵略行爲、以維護東亞
之和平、查梅屋爲中山老友、前年曾一度
來華、生平對三民主義、極爲信仰、對於
中日問題、尤認爲非中日互相提攜不可、
自九一八事變發生後、梅氏以其國內軍
閥如此鐵悍、則非常憤慨、最近梅聞事件
發生、梅氏更爲憤激、故作此表示云(十
日專電)

昨接見各要員

蔣委員長
南京 蔣委員長十日在軍校私邸接見
各要員、商要務、計有張學良、鮑文樞、吳鐵
城、孫元化、劉珍年、等十餘人、又宋美齡
偕宋鶴齡步日晨由滬乘車抵京、(十日中
央社電)

召集部務會

訓練總監部

南京 訓練總監部十日晨召集部
務會議、出席總監朱培德、副總監周亞衛、
暨張耀輝、騎兵監汪錦基、工兵監吳
福重、監李國良、砲兵校長周斌、
校長李宏春、步兵校長王傑、工兵校
長柏壽等、開討論操典、應加改良之點
、各兵監各校長專科人員提出意見、
修正、(十日專電)

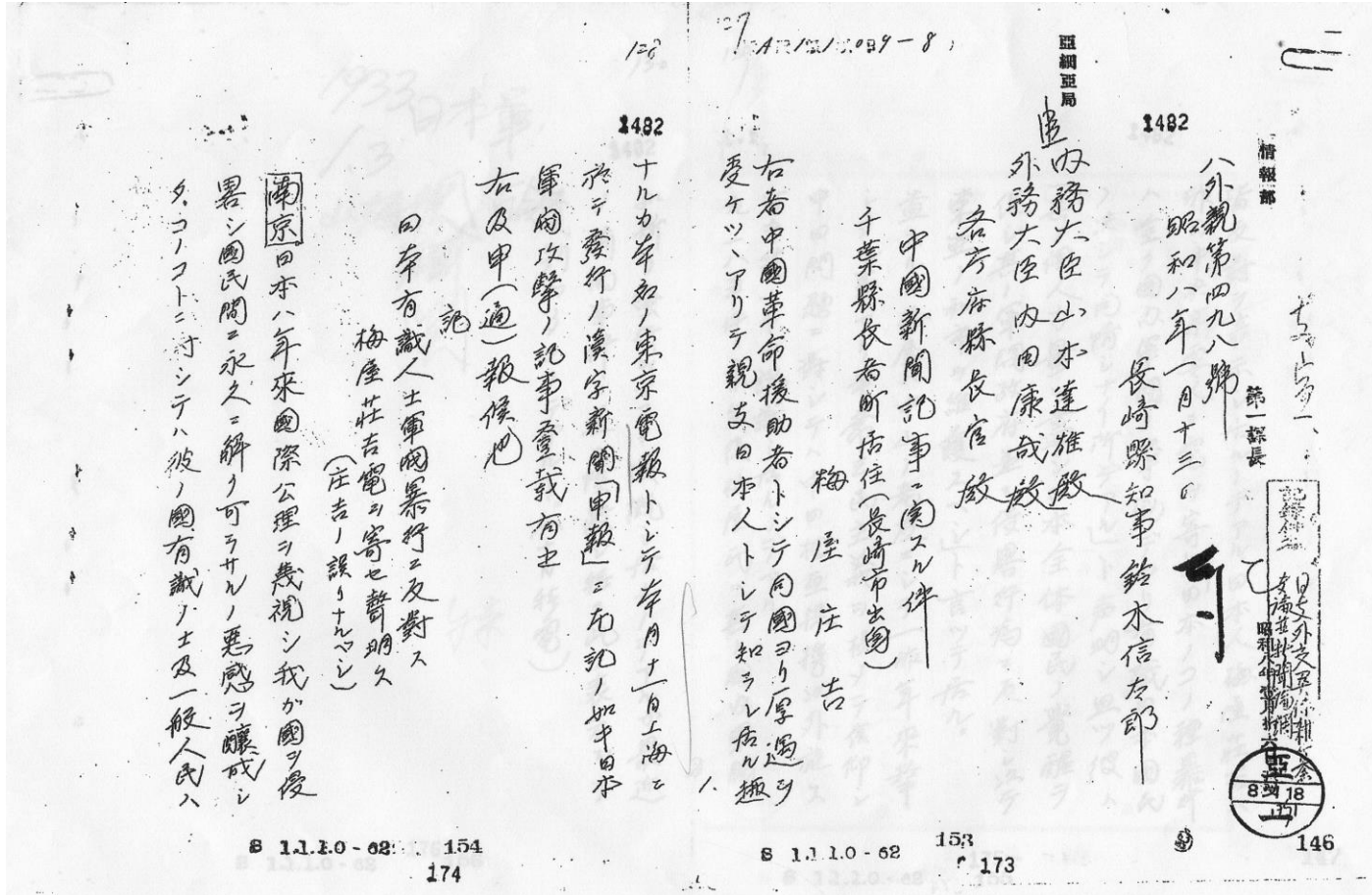
準備自德回

汪精衛
南京 宋子文日前曾致電汪精衛
、謂早日回國主持院務、
汪覆電、謂將於六七週後由滬啟程
、約三月底可抵滬、(十日專電)

世界經濟會議 在英開幕

財部令孔祥熙代表

外交史料館文書「昭和8年1月13日、長崎県知事鈴木信太郎より
外務大臣内田康哉等宛報告」「日本有識人士軍閥暴行ニ反対ス
梅屋莊吉来電ヲ寄セ声明ス」



皆反對ヲ表示シ居ルノデアル日本入梅屋莊吉ハ
昨日中央某要人ニ電ヲ寄セ日本ノコノ程暴行
ハ全ク國内軍閥ノ舉動デアリ有識日本國民
ノ決シテ同情シナイ所デアルトト声明シ且ツ彼ハ
「吾ノ個人力量ヲ盡シ日本全体國民ノ覺醒ヲ
促シ吾ノ軍閥政府並ニ侵略行為ニ反對シ以テ
東亞ノ和平ヲ維護スベシト」言ツテ居ル。

査スルニ梅屋ハ中山ノ老友ニシテ一昨年来華
シタル事アリ平常ニ民主義ヲ極メテ信仰シ
中日問題ニ對シテハ中日相互提携以外施ス
可キ策ナキヲ認識シ居ルノデアル。
九一八事件發生後梅屋氏ハ吾ノ國内軍閥カ

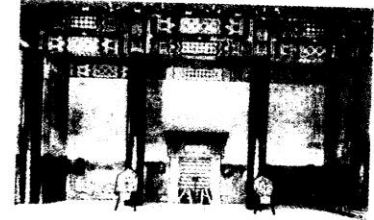
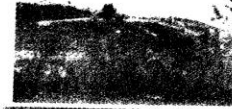
1.3
山崎閣員

山崎閣員

如斯ク變行ヲナスニ決斷シ居タノデアルカ最近
ノ橋岡事件ニ連ニ墮激シ極ニ此ノ表示ヲナ
スニ到ツタモノデアルト。(十日特電)

録

前列右から古島一雄、犬養毅、
 頭山満、萱野長知、2列目中列、
 黄興の息子、娘、後列に犬養毅
 の息子犬養健、昭和4年6月
 (慰霊祭出席者、南京の黄一欧
 (黄興の息子邸にて))



陵山中(下左) 陵山中(下右) 黄一欧の祭霊祭(中) 陵山中(上左) 陵山中(上右)

史料紹介

萱野長知より中村弥六あて書簡

一九二二年二月一日

書簡

拜啓

南京を経て去る十日、午前十時漢口着、直ちに
 武昌の軍都督府より、転じて江を渡り漢陽に入り候。普興
 は総司令官として最も敵と接近せる漢陽の司令部に在り
 て漢水を隔てて対陣いたし居候。弟は黄と共に起臥同一
 處に為すことと為りたれば通信等は中々一寸の間にも合
 不申候。弟の連れ行きたる一行は武昌の軍に編入され大
 に活動いたし居候。弟の報告よりは漢口に在る寺西中佐
 の報告こそ便宜ニ且つ確定に有え候。弟等より先發した
 る某某氏^①と寺西中佐の方より入れたる連中其他協力して
 軍を提げて大に活躍いたし居候。支那人も非常の奮も
 て迎へ唯一の相談相手と相成居候。此一団の連中皆非常
 の決心をもて尽力いたし居候間御安神被下度候。岡次官^④

史料紹介・萱野長知より中村弥六あて書簡一九二二年二月一日

のお申しありたる上海の本庄少佐^②と連絡して南京の古川
 中佐^③漢口の寺西中佐等の連絡をもて行動いたし居候間
 不便なる陣中よりの報告よりは此の寸の報告に任せ申候。
 故軍は昨日太湖南よりの援軍^⑤六千余到着。尚一両日中に
 三千余も到到すべく候故大に優勢と相成候。此半戦上海
 に達すも頃は目覚ましき大活劇を見ることと樂み居候。漢
 口さへ恢復すれば大事定ることにて武漢軍は所謂此一戦
 を実行すべく振し居候。官軍は士気振は下糧食欠乏、戦
 意なし、度々糧和を申込みれどもハ不付け申候。弟等
 はお蔭にて目的を達し候。此の天下分け目の大戦に参加
 することを得たる、感謝の外無之候。宮崎と御相談の孫
 逸仙の渡来を急電被成度候。戦後の粉塵も続々出て来
 る見込につき、孫氏の入漢は他日の地盤に關し候。可
 事は此の一戦を決して画策することと□□候。今や実行
 に移り軍務に多忙を極め通信の余暇無之のみならず陣中
 甚だ不便につき左様御承知被下度候。孫君の善悪非共大
 急ニ願上候。先は右ノみ、勿々。総司令部にて、鳳梨、
 十三日。

一〇五

「萱野長知より中村弥六あて書簡
 ——1911年11月」は「辛亥革命研
 究第3号」（1983・3）久保田文次
 は「説明」で「萱野のこの書簡は、
 中村の弁明や梅屋の同情を裏書す
 るものといえよう。」と中村弥六
 について述べている。

孫中山真蹟「萱野よりの電報は確かに請取りたり感謝す孫文」

(米国シカゴ大塚太郎転交として中山先生の帰来を懇請した。此の大塚は著者の親戚にて米国に居住すること数十年、曾て中山を紹介して秘密に与りたることあり故に中山の居所を知り居れり。) 萱野長友『中華民國革命秘笈』。辛亥革命1911年勃発時、中村弥六は衆議院議員。

(1回~7回選挙当選、8,9回立候補せず、10回当選(1908~12年議員) 11回立候補せず、13回

(大正6年4月次点、小川平吉に敗北次点) 森下正夫『中村弥六物語』

N.Y. Oct. 22, 1911.

Dear Mr. Otuka:-

I have received
Mr. Kayano's cablegram
Many thanks to you.

Very truly yours
W. Sun

OCT 22 1911
Mr. Taro R. Otuka
444 B Michigan
Chicago
Ill

萱野仁兄是下今東軍將起欲得

於軍事上有學問經驗之人以爲

顧問弟全我

兄雄武過人請以東軍顧問之任

相託望襄助都督以建偉業並

懇延攬同志以資臂助

兄之熱誠弟所深信望珍重此清

孫文 弟孫文謹啓

孫中山真蹟

フランスから中国への帰途、
香港の船上で
(1911年11月24日)

1911年11月24日、孫中山同志
因病乘舟回國。因為抵達香港時
是船上的一幕。



民國元年 於
香港 船中
攝



革命軍へ派遣された救療班
頭山満らによる革命援助組織「有隣会」が辛亥革命発後、中国へ派遣した救療班の送別会。南京に陸軍病院が設立された中心となった。
派遣された革命軍の第一任主席孫文と革命援助組織「有隣会」の中心人物頭山満らによる送別会。南京に陸軍病院が設立された中心となった。

孫文の香港到着を歓迎する
人びと（1911年12月21日デ
ンバー号で）前列左から
ホームー・リー、山田純三
郎、胡漢民、孫文、陳少白、
何天炯、後列左から6番目
宮崎滔天、（写真右上、
（日本から）頭山満らの革
命救援組織が送った「革命
軍へ派遣された救療班」
（「孫文と横浜」展、1989
年、有隣堂）



孫文の香港到着を歓迎する人びと(1911年12月21日デンバー号上で)
前列左からホームー・リー、山田純三郎、胡漢民、孫文、陳少白、何天炯、
後列左から6番目宮崎滔天
1911年12月21日、孫中山同志歸國、座落香港時在船上與歡迎者、
頭山満、山田純三郎、胡漢民、陳少白、何天炯、
後列左から6番目宮崎滔天、
撮影。